

<b>Title</b>	2016年度実施学士課程上級生調査からみる女子学生の教育ニーズ：調査結果の男女差に基づく検討
<b>Author</b>	西垣, 順子
<b>Citation</b>	大阪市立大学大学教育. 16 卷 1 号, p.1-7.
<b>Issue Date</b>	2018-10
<b>ISSN</b>	1349-2152
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学教育研究センター
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20181115-010

Placed on: Osaka City University

■ 報告

2016年度実施学士課程上級生調査からみる  
女子学生の教育ニーズ  
－調査結果の男女差に基づく検討－

Educational Needs of Undergraduate Women Students: Comparative Analysis of  
Women and Men Based on Student Survey Conducted in 2016

西 垣 順 子

大阪市立大学 大学教育研究センター

NISHIGAKI Junko

Osaka City University, Center for Research and Development of Higher Education

Abstract

This study investigates women students' educational needs based on the Osaka City University student survey of sophomore, junior, and senior students in undergraduate programs conducted in 2016. Although OCU is a coeducational university, females might have different educational needs than male students. There seemed no clear difference in the paths that male and female students may take after graduation; however, it could be said that male students in science and engineering courses displayed the tendency to exclude alternative options of joining graduate school. Women students showed stronger will to acquire knowledge, skills, and certification before graduation. They also showed stronger hope to have a chance to talk with people working outside the university. There was no gender difference in the desire to enroll in the education programs offered by university. As for daily learning activities, female students more frequently engaged in discussions on learning contents with their peers, and utilized the information available on the web, while male students more often displayed negative actions, such as tardy arrival and absence. Moreover, female students in humanities and social science courses used the library more frequently than male students, and female students in science and engineering courses more often approached the staff to receive learning support. There was no difference between the two genders with regard to communicating with teachers during learning activities.

It could be said that while women students might be well-adapted to university learning, they seem to require the learning opportunities that have different characteristics than the educational programs currently being offered by universities.

**キーワード** : 学士課程学生調査、男女差、女子学生のニーズ、キャリアデザイン、将来展望

**Key Words** : Student Survey, Gender Difference, Needs of Women Students, Carrier Design, Future Perspective

1. はじめに

現在でいうところの学士課程段階での男女共学が、日本で最初に実現してから100年が経った<sup>1)</sup>。現在では大学進学率そのものの男女差はほぼないと言われていたが、専門分野ごとの偏りなどのジェンダーギャッ

プは解消していない。また学生たちが卒業後に働き生活していく社会の中には、多種多様なジェンダーに関わる問題が存在している。

女子学生への教育のあり方については、キャリア教育の立場からの先行研究がいくつも存在しており (e.g., 柴田・安住, 2011; 安達, 2012)、女子大学を

中心に女子学生のための教育プログラムの開発も行われている (e.g., 小森・木間, 2017; 井上, 2014)。他方で日本における教学IRや学生調査研究の文脈では、ジェンダーによる違いを分析している研究はあまり見あたらない。男女共学を前提とした大学では教育課程そのものに男女の区別はなく、卒業後の進路に関して、「女子だから」「男子だから」ということを明示した指導は基本的に行われていないと推測する。他方で、現在や卒業後の学生を取り巻く社会環境におけるジェンダー差の存在を考えると、学生調査から女子学生、男子学生それぞれの教育ニーズを分析しておくことは必要と考える。

そこで本研究では、2016年に大阪市立大学で行った学士課程上級生調査の結果をもとに、主に女子学生の

教育ニーズについて検討する。特に、2014年度にほぼ同様の調査を行った際、「卒業までに経験したいこと」に係る項目への回答に全体的に大きめの男女差が見られていたことから (大学教育研究センター, 2015)、将来展望や今後の学修への期待を中心に分析する。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象者

2016年度学士課程上級生調査への回答者は2,023名で回答率は51%であった<sup>2)</sup>。このうち学年や所属の記載に不備があった者と5年生以上の者を除いた2,001名の回答を本研究の対象とした。表1に性別・所属・学年別の人数分布を示した。

ここで表1の「所属」について補足しておく。学

表1 性別 (男女) ×所属 (文系、理工、医療、生活) ×学年 (2・3・4年) の人数分布表

	2年生				3年生				4年生			
	文系	理工	医療	生活	文系	理工	医療	生活	文系	理工	医療	生活
男性	83	186	73	16	119	231	48	14	88	257	48	11
女性	94	65	43	62	129	45	35	87	108	54	32	73

生の所属学部と性別には交絡があり、単純に性別による比較をただけでは性差と学部差の違いが不明になるために、学生の所属と性別をとともに独立変数とした分析が必要になる。他方で、本学は学部数が9つ (医学部は2学部と数える) もある上に、実際の回答者数には大きなばらつきがあったため、学部を独立変数として分析すると解釈が非常に難しくなる。そこで本研究では、文系4学部 (商経法文) を「文系」、理学部と工学部を「理工系」、医学科と看護学科を「医療系」、生活科学部を「生活系」として、これら4つの系を学生の「所属」として以下の分析を行っていくこととする。

### 2.2. 調査方法と調査票の構成

調査票とマークシートが、2016年10月から11月にかけて、各学部で実施される授業やガイダンスで配布・回収された他、事務カウンターでの書類等の提出時に配布・回収されたものもあった。学生はその場で回答した場合と、後日に事務室等に設置された回収ボックスにマークシートを提出した場合とがあった。

調査票は大学教育研究センター (2018) に掲載されているが、「I. 回答者の属性」「II. 学修状況」「III. 満足度」「IV. 卒業までに経験したいこと」「V. 将来展望」「VI. 卒業後の進路希望」の6つのパートからなり、A4で6ページである。本稿で分析に使用する項目は次のとおりである。

卒業後の進路希望：次の11項目について、あてはまるものすべてを選択してもらった。「1. 民間企業への就職」「2. 公務員」「3. 学校教員」「4. 自営業」「5. NPO等で働く」「6. 本学大学院への進学」「7. 国内の他大学大学院への進学」「8. 海外の大学・大学院へ進学」「9. 大学・大学院への進学以外の留学 (語学研修など)」「10. その他」「11. 特になし」

将来展望：次の4項目から1つを選択してもらった。

1. 将来の見通しを持っている + 何をすべきかをわかっているし、実行もしている
2. 将来の見通しを持っている + 何をすべきかをわかっているが、実行はできていない
3. 将来の見通しを持っている + 何をすべきかわからない

4. 将来の見通しを持っていない

卒業までに経験したいこと：「卒業後の進路の準備をしたり考えたりするために、次のようなことがらを大学在学中に経験したいと思いませんか」と尋ね、表3の13項目について「そう思う」から「そう思わない」の4件法で回答してもらった。

現在の学習行動：表4の15項目について「ひんぱんにした」から「まったくしなかった」の4件法で回答してもらった。

3. 結果と考察

以下の統計分析は、SPSS Statistics Ver.24を用いて行った。卒業後の進路希望と将来展望の回答についての検定にはカイ二乗検定を行い、危険率5%未満で有意な偏りが見られた場合には残差分析を行った。調整残差が-2より小さい場合は当該の箇所への回答数の分布が有意に小さいことを、+2より大きい場合は当該箇所への分布が有意に大きいことを示す。

「卒業までに経験したいこと」と「現在の学習行動」については性別×所属×学年の3要因分散分析を行った。ただし紙幅の関係もあり、本稿では性別による主効果と交互作用に焦点を絞って報告する。また、性別と所属の間に交互作用が見られた場合は、続く分析での対象者は文系所属と理工系所属に絞り込むこととした。これは医療系と生活系では、所属学科と性別の交絡が見られたり、どちらかの性別の人数が非常に少なかったりするために、交互作用の解釈が困難なためである。

3.1. 卒業後の進路希望と将来展望

卒業後の進路として100名以上の回答者に選択されていた項目について、性別・所属・学年別の選択と非選択の分布を章末の付表1に示した。全体として進路希望に男女差は見られないが、理工系の男子は3年生の段階では民間企業や公務員を選択肢から除外している者が多く、女子に比べると早々に大学院進学を決定する傾向があるように思われる。

性別・所属・学年別の将来展望についての回答分布を表2に示した。回答の分布に男女での違いがあるかについてカイ二乗検定を行ったが、有意な偏りはみら

表2 将来展望の状態について性別×所属×学年の人数分布（カッコ内は割合）

		文系	理工	医療	生活	合計
男性 2年生	実行	13 (0.16)	22 (0.12)	24 (0.37)	0 (0.00)	59 (0.17)
	実行無	27 (0.34)	49 (0.26)	23 (0.35)	5 (0.33)	104 (0.30)
	理解無	17 (0.21)	52 (0.28)	13 (0.20)	4 (0.27)	86 (0.25)
	展望無	23 (0.29)	62 (0.34)	5 (0.08)	6 (0.40)	96 (0.28)
男性 3年生	実行	20 (0.17)	33 (0.15)	12 (0.29)	3 (0.23)	68 (0.17)
	実行無	48 (0.41)	77 (0.34)	19 (0.45)	5 (0.38)	149 (0.38)
	理解無	27 (0.23)	62 (0.28)	4 (0.10)	3 (0.23)	96 (0.24)
	展望無	22 (0.19)	53 (0.24)	7 (0.17)	2 (0.15)	84 (0.21)
男性 4年生	実行	20 (0.23)	46 (0.18)	17 (0.37)	4 (0.36)	87 (0.22)
	実行無	38 (0.44)	79 (0.31)	16 (0.35)	4 (0.36)	137 (0.35)
	理解無	17 (0.20)	57 (0.23)	7 (0.15)	2 (0.18)	83 (0.21)
	展望無	12 (0.14)	70 (0.28)	6 (0.13)	1 (0.09)	89 (0.22)
女性 2年生	実行	11 (0.12)	2 (0.03)	13 (0.31)	6 (0.10)	32 (0.12)
	実行無	35 (0.37)	19 (0.29)	21 (0.50)	12 (0.20)	87 (0.33)
	理解無	21 (0.22)	27 (0.42)	7 (0.17)	25 (0.42)	80 (0.31)
	展望無	27 (0.29)	17 (0.26)	1 (0.02)	17 (0.28)	62 (0.24)
女性 3年生	実行	27 (0.21)	6 (0.14)	14 (0.41)	14 (0.16)	61 (0.21)
	実行無	33 (0.26)	19 (0.43)	13 (0.38)	22 (0.26)	87 (0.30)
	理解無	40 (0.31)	9 (0.20)	2 (0.06)	32 (0.37)	83 (0.29)
	展望無	27 (0.21)	10 (0.23)	5 (0.15)	18 (0.21)	60 (0.21)
女性 4年生	実行	33 (0.31)	9 (0.17)	8 (0.27)	17 (0.23)	67 (0.25)
	実行無	47 (0.44)	24 (0.44)	17 (0.57)	20 (0.27)	108 (0.41)
	理解無	18 (0.17)	14 (0.26)	3 (0.10)	21 (0.29)	56 (0.21)
	展望無	9 (0.08)	7 (0.13)	2 (0.67)	15 (0.21)	33 (0.13)

注：  
 実行：将来の見通しを持っている+何をすべきかもわかっているし、実行もしている  
 実行無：将来の見通しを持っている+何をすべきかをわかっているが、実行はできていない  
 理解無：将来の見通しを持っている+何をすべきかわからない  
 展望無：将来の見通しを持っていない

れなかった ( $\chi^2(3) = 7.3, p = .06$ )。他方で、所属と学年による分布の違いは男女で異なっていた。

男性と女性のそれぞれで、所属と学年で回答の偏りが見られるかを検定したところ、所属の違いは男女双方で確認できたが (男性:  $\chi^2(9) = 52.0, p = .00$ ; 女性:  $\chi^2(9) = 57.6, p = .00$ )、残差分析の結果のパターンは異なっていた。男性では文系で「実行無」が多く、理工系では「実行」が少なく「実行無」「理解無」「展望無」が多かった。医療系で「実行」が多く「理解無」と「展望無」は少なかった。他方の女性は、理工系で「実行」が少ないこと以外には文系と理工系においては分布の偏りがなかった。医療系で「実行」と「実行無」が多く「理解無」と「展望無」は少なかった。生活系で「実行無」が少なく「理解無」が多かった。

学年による違いは女性でのみみられた (男性:  $\chi^2(6) = 11.47, p = .08$ ; 女性:  $\chi^2(6) = 31.2, p = .00$ )。女性について残差分析を行ったところ、2年生では「実行」が少なく「展望無」が多かったが、4年生では「実

行」が多く「理解無」と「展望無」が少なかった。つまり、女性は学年が高くなるにつれて将来に向けて考えたり行動したりするようになるが、男性はその傾向が小さい。このことには、上記の所属による回答の分析で、理工系の男性の「実行無」「理解無」「展望無」が多いが女性ではそのような傾向がなかった(但し「実行」が少ないことは共通)ことが影響しているのではないかと考えられる。

まとめると、理工系の男性は比較的早い段階で大学院進学を決める傾向がある一方で、将来展望を定めたり、行動したりことが少なめであることが伺える。それに対して、理工系の女性は大学院に進学する場合でも、比較的幅広く進路や将来について考えている可能性が伺える。

### 3.2. 卒業までに経験したいこと

卒業までに経験したいことを尋ねた14項目全体について、性別×学年×所属の多変量分散分析を行ったと

表3. 卒業までに経験したいことへの回答の男女別の平均と標準偏差

	男性	女性	
専門分野をしっかりと身につける	3.49 (0.72)	3.56 (0.65)	F(1,1912) = 15.05 **
専門分野だけでなく、幅広い知識を身につけ視野を広げる	3.43 (0.70)	3.57 (0.59)	F(1,1912) = 21.43 **
職業意識の形成につながる教育を受ける	3.20 (0.76)	3.31 (0.72)	F(1,1912) = 11.34 **
企業での体験実習・インターン等を踏まえた上で、専門知識を学ぶ	3.07 (0.82)	3.12 (0.80)	F(1,1912) = 2.79
教員が設定した課題に対して、チームで取り組むプロジェクト型の授業を受ける	2.93 (0.80)	2.91 (0.81)	F(1,1912) = 0.01
自分で課題を見つけ、自分で解決していくような訓練を受ける	3.16 (0.74)	3.22 (0.72)	F(1,1912) = 1.40
ディベートやプレゼンテーションの訓練を受ける	3.14 (0.76)	3.21 (0.77)	F(1,1912) = 1.66
実践的で専門性のある資格を取得するためのプログラムを受ける	3.02 (0.82)	3.16 (0.79)	F(1,1912) = 12.73 **
外国語能力や国際性を身につけるための海外研修プログラムに参加する	2.78 (0.91)	2.85 (0.92)	F(1,1912) = 1.34
レポートや論文指導により、文書作成能力を高める	3.15 (0.75)	3.27 (0.71)	F(1,1912) = 11.69 **
卒業後の進路について、教職員に対して個別に相談する	3.00 (0.82)	3.07 (0.82)	F(1,1912) = 3.38
卒業後の進路について、本学の卒業生や先輩と話を	3.09 (0.81)	3.28 (0.76)	F(1,1912) = 21.82 **
本学の教職員以外の社会人と話を	3.02 (0.82)	3.17 (0.81)	F(1,1912) = 10.33 **

カッコ内は標準偏差

\*\*は有意な男女差があった項目 (いずれも女子の評定が高い)

ころ、性別、学年、所属の主効果と学年と所属の交互作用が有意であったが<sup>3)</sup>、性別との一次・二次の交互作用は有意ではなかった。そのため以後は、女子学生のニーズを知るという本稿の目的に絞って、各項目の性差についてのみ述べる。

表3に14項目への回答の男女別の平均値と標準偏差を示し、男女差についての分散分析の結果も示した。女性による評定が男性よりも高かった項目は、知識習得や資格取得など学修成果に係るものと、卒業生や社会人といった学外の年長者に進路等を相談する機会がほしいという内容のものであった。他方で、学修経験そのもの（プロジェクト型授業、ディベート訓練など）への経験希望評定には男女差は見られなかった。

### 3.3. 現在の学習行動

現在の学習行動の頻度について尋ねた14項目全体について、性別×学年×所属の多変量分散分析を行ったところ、性別、学年、所属の主効果と、性別×所属の交互作用及び学年×所属の交互作用が有意であった<sup>4)</sup>。性別と所属の交互作用が有意であったことから、以下の分析は文系所属と理工系所属の学生のみを対象に行うこととし、改めて、性別×学年×所属の多変量分散分析を行った。全対象者の分析と同様に、性別、学年、所属の主効果と、性別×所属の交互作用及び学年×所属の交互作用が有意であった<sup>5)</sup>。そこで続いては、女子学生のニーズを知るという本稿の目的に絞って、項

表4. 性別×所属ごとの学習行動項目への回答の平均と標準偏差

	文系		理系		分散分析結果	
	男性	女性	男性	女性	性別×所属 交互作用	性別の主効果
授業課題のために図書館の資料を利用した	2.97 (0.81)	3.17 (0.76)	2.85 (0.89)	2.76 (0.89)	F(1, 1418) = 8.12 **	F(1, 1418) = 10.12 **
授業課題のためにWeb上の情報を利用した	3.35 (0.69)	3.52 (0.66)	3.39 (0.78)	3.49 (0.67)	F(1, 1418) = 0.75	F(1, 1418) = 0.63
インターネットを使って授業課題を受けたり提出したりした	2.55 (1.04)	2.72 (1.01)	2.60 (1.07)	2.58 (1.05)	F(1, 1418) = 3.40	F(1, 1418) = 23.69 **
提出期限までに授業課題を完成できなかった	1.73 (0.86)	1.53 (0.74)	1.93 (0.91)	1.62 (0.85)	F(1, 1418) = 1.24	F(1, 1418) = 7.79 **
授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり授業内容を話したりした	2.64 (0.89)	2.82 (0.87)	2.96 (0.92)	3.09 (0.86)	F(1, 1418) = 0.50	F(1, 1418) = 20.00 **
授業中、教員の考え方や意見に異議を唱えた	1.60 (0.80)	1.42 (0.65)	1.55 (0.77)	1.33 (0.59)	F(1, 1418) = 0.07	F(1, 1418) = 27.85 **
授業を欠席した	2.67 (0.86)	2.38 (0.83)	2.26 (0.91)	1.97 (0.85)	F(1, 1418) = 0.00	F(1, 1418) = 8.88 **
授業に遅刻した	2.57 (0.93)	2.41 (0.92)	2.34 (0.95)	2.15 (0.89)	F(1, 1418) = 0.31	F(1, 1418) = 6.17 *
授業をつまらなく感じた	3.02 (0.79)	2.93 (0.73)	2.91 (0.83)	2.79 (0.82)	F(1, 1418) = 1.01	F(1, 1418) = 1.59
授業中に居眠りをした	2.72 (0.91)	2.85 (0.90)	2.71 (0.92)	2.73 (0.89)	F(1, 1418) = 2.94	F(1, 1418) = 0.68
教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用したりした	1.74 (0.86)	1.79 (0.83)	1.88 (0.95)	1.88 (0.92)	F(1, 1418) = 0.06	F(1, 1418) = 2.58
単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した	1.63 (0.94)	1.51 (0.87)	1.58 (0.86)	1.50 (0.79)	F(1, 1418) = 8.22	F(1, 1418) = 2.15
大学の教職員に将来のキャリアや就職の相談をした	1.64 (0.86)	1.69 (0.92)	1.68 (0.89)	1.74 (0.90)	F(1, 1418) = 0.35	F(1, 1418) = 8.20 **
教員に親近感を感じた	2.30 (0.96)	2.38 (0.93)	2.17 (0.95)	2.35 (0.96)	F(1, 1418) = 1.82	
TAなどの授業補助者、学習サポーターから支援を受けた	1.48 (0.77)	1.55 (0.77)	2.04 (0.95)	2.43 (1.03)	F(1, 1418) = 10.89 **	

1) カッコ内は標準偏差

2) \*は5%水準で、\*\*は1%水準で有意な差があった項目

3) 性別と所属の交互作用が見られた場合は、性別の主効果の検定は行わずに所属ごとの性別の単純主効果の検定を行った（本文参照）

目ごとに性別と所属の交互作用および性別の主効果についてみていく。

表4に各項目への回答の、性別と所属ごとの平均値と標準偏差を示し、分散分析の結果も併せて示した。有意な性別の主効果が文系理系を問わずに次のように見られた。女子学生は男子学生よりもWEB上の情報を多く利用し、他の学生と一緒に勉強をしていた。教員に親近感を感じることも多かった。他方で、課題の提出期限に間に合わなかったり、教員に意見を言ったり、授業を欠席・遅刻することやつまらなく感じることは少なかった。

所属によって性差の出方が異なっていたのは、図書館利用とTA等支援者からの支援であった。これら2項目では交互作用が見られたので、文系理系のそれぞれで性別の単純主効果の検定を行った。図書館利用では文系でのみ性差が見られ、女性は男性よりも図書館の利用頻度が高かった ( $F(1,614) = 10.178, p = .00$ )。TA等支援者からの支援では理系でのみ性差が見られ、女性は支援を受けることが有意に多かった ( $F(1,822) = 20.252, p = .00$ )。他方で、教員に相談するなどの教員との交流については性差がなかった。全体として、女性は男性よりも教員が提供するもの以外の学修資源を活用していると言えよう。

#### 4. まとめ

上級生調査への回答には次のような男女差が見て取れた。大学が提供する教育プログラム(インターンシップなどの学外との協力によるプログラムも含む)への意欲、及び教員とのコミュニケーションを伴う学習活動の頻度には男女差がなかった。他方で、女性は男性よりも知識やスキル、資格の獲得を強く望んでおり、大学の外で暮らしている卒業生や社会人との対話も強く望んでいた。現在の学習活動においては、授業に真面目に臨む一方で、友人やTAなどの比較的同世代の人とのコミュニケーションを通じた学びが多かった。授業への欠席・遅刻などのネガティブな学習行動は少なかった。卒業後の進路や将来展望についても、女性は男性よりも幅広く様々な事柄を検討している可能性が示唆されていた。

これらの結果を踏まえて考えると、女子学生は本学

での学習に適応していると言えるが、教員を中心に大学から提供している教育が彼女たちの持つ顕在的・潜在的な教育ニーズに十分にこたえているのかには疑問も残る。一般に、教員を中心に大学が提供する教育プログラムは、明確な学習目標が設定されて実施される。だが、卒業後の生き方について考える際には、働くこと、家庭を持つこと、地域社会に参加すること等々の多くの事柄を同時に検討しなければならず、それぞれの事柄が要求してくる能力やスキルは互いに異なってもいる。このような卒業後の人生に於ける多面性や複雑性は、決して女性だけの問題ではないが、現在の日本の大学生の認識という点で見ると、女子学生の方がより強くこれら複雑な問題に直面している、または近いうちに直面することを想定しているとしても不思議はない。それが結果として、女子学生が能力向上と学外者との対話を求めることにつながっている可能性はあるだろう。

本学の学生調査において、男女差を重点的に検討したのは今回が最初であり、確定的なことを主張するにはもう少し継続的なデータの収集が必要とは思われる。今後、データの収集・分析を行いつつ、学修支援のあり方の検討にも生かしていく必要があるだろう。

#### 注釈：

- 1) 1916年に栗山津欄が、女子大学では学べない漢文を学びたいと東洋大学に入学したのが最初であると言われる(朴木、印刷中)。
- 2) 大学教育研究センター発行の報告書を参照(大学教育研究センター、2018)
- 3) それぞれのF値は、性別F(13, 1900) = 4.28、学年F(26, 3802) = 2.67、所属F(39, 5706) = 4.92、学年と所属の交互作用F(78, 11430) = 1.48であり、危険率(p)はいずれも1%未満であった。
- 4) それぞれのF値は、性別F(15, 1921) = 9.00、学年F(30, 3844) = 6.18、所属F(45, 5769) = 12.95、性別×所属の交互作用F(45, 5769) = 1.85、学年×所属の交互作用F(90, 11556) = 2.82であり、危険率(p)はいずれも1%未満であった。
- 5) それぞれのF値は、性別F(15, 1404) = 8.27、学年F(30, 2810) = 7.65、所属F(15, 1404) = 30.65、性別×所属の交互作用F(15, 1404) = 2.26、学年×所属の交互作用F(30, 2810) = 2.84であり、危険率(p)はいずれも1%未満であった。

文献リスト

安達智子 (2012), 「科学技術職への興味とその規定因－自己効力と男女差に着目した検討－」, 『心理学研究』, 第83巻, 479－488.

大学教育研究センター (2018), 「2016年度実施 学士課程上級生調査 結果報告書」

大学教育研究センター (2015), 「本学の学士課程教育の学習成果に関する調査報告書－2014年秋実施 1年生、上級生、卒業生調査結果の報告－」

朴木佳緒留 (印刷中), 「大学教育における男女の教育機会均等－東洋大学男女共学100周年記念によせて－」, 『現代社会と大学評価』, 第14号

井上俊也 (2014), 「女子大学生のキャリア教育における参謀型人材の育成」, 『大妻女子大学 人間生活文化研究』, 第24号, 1－21

小森亜紀子・木間英子 (2017), 「昭和女子大学社会人メンター制度がメンター・学生双方にもたらす効果及び今後の課題」, 『昭和女子大学女性文化研究所紀要』, 第44号, 23－38.

柴田由己・安住伸子 (2011), 「女子大学生への進路選択に対する自己効力感と進路探索行動－進路選択過程としての就職活動に着目して－」, 『キャリア教育研究』, 第29号, 71－80.

付表1. 卒業後の進路希望 (100名以上が選択した進路のみ)

	民間企業		公務員		学校教員		本学大学院		他大学大学院		その他	
	選択	非選択	選択	非選択	選択	非選択	選択	非選択	選択	非選択	選択	非選択
文系2年男	46	35	46	35	6	75	12	69	12	69	8	73
文系2年女	62	32	45	49	9	85	6	88	11	83	11	83
文系3年男	87	30	18	99	8	109	7	110	8	109	9	108
文系3年女	100	28	30	98	9	119	7	121	7	121	5	123
文系4年男	68	19	14	73	4	83	4	83	2	85	2	85
文系4年女	76	31	18	89	8	99	3	104	1	106	7	100
理工2年男	91	94	50	135	22	163	100	85	65	120	18	167
理工2年女	34	30	16	48	5	59	44	20	24	40	5	59
理工3年男	97	127	27	197	21	203	126	98	41	183	15	209
理工3年女	25	19	7	37	6	38	22	22	12	32	2	42
理工4年男	83	169	18	234	15	237	145	107	18	234	6	246
理工4年女	28	26	6	48	2	52	24	30	5	49	0	54
医療2年男	3	61	9	55	0	64	3	61	3	61	36	28
医療2年女	9	31	7	33	2	38	0	40	7	33	21	19
医療3年男	7	35	7	35	2	40	3	39	1	41	13	29
医療3年女	8	25	6	27	0	33	2	31	4	29	17	16
医療4年男	9	38	3	44	0	47	2	45	1	46	31	16
医療4年女	2	28	7	23	0	30	1	29	1	29	20	10
生活2年男	9	6	10	5	1	14	3	12	2	13	2	13
生活2年女	44	16	24	36	5	55	12	48	8	52	7	53
生活3年男	8	5	3	10	1	12	2	11	4	9	0	13
生活3年女	61	25	19	67	2	84	22	64	6	80	9	77
生活4年男	5	6	4	7	0	11	3	8	1	10	0	11
生活4年女	46	27	17	56	1	72	11	62	1	72	3	70

注) それぞれの項目の選択状況についてカイ二乗検定を行い、分布に有意な偏りが見られた場合に残差分析を行った。調整化残差が2以上 (有意に多くの回答が分布していた) セルをグレーにした。